

FLORA KANAGAWA

May 31. 1997 No. 44

神奈川県植物誌調査会ニュース第 44 号

〒250 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

振替 00230-5-10195



アスヒカズラ。田代道彌氏が1978年5月16日、箱根下双子山で撮影した、貴重な記録写真である。県内では今は生育していない「絶滅種」。松浦茂寿(1950)の箱根植物目録には「早雲山(勝俣)」の記録がある。

高橋秀男・諏訪哲夫：神奈川県新記録のテツカエデについて	480
城川四郎：ヤブマオ属をどう扱うか	481
秋山 守：丹沢産シロテンマ(一名ヒメテンマ)覚え書き	487
諏訪哲夫：明治時代の神奈川県産植物標本について	488
田中一雄：神奈川県新産と思われるシダおよびその他	489
平田寛重：丹沢での希少なランの記録	490
星 寛治：三浦半島で発見されたカゲロウラン	491
事務局：神奈川県植物誌調査会 1997年度総会報告	493

神奈川県新記録のテツカエデについて

高橋秀男・諏訪哲夫

1995年10月9日、厚木市教育委員会の主催により厚木側大山の植物垂直分布を調べるため高橋、諏訪他数名で不動尻から山頂を目指した。不動尻からの山道は、かなり険しく、主にスギ・ヒノキ・カラマツなどの林が続くが、海拔820mの唐沢峠に至りようやく植林は終り、広葉樹やモミの樹林帯になる。ちょうど、昼食時であったので峠のやや平坦な場所を選んで腰を下ろしたが、その時、筆者の一人諏訪の目に留まったのが1株のテツカエデの垂高木であった。高橋に1枝を渡し、テツカエデではないかということになったのだが、勿論この時は県下新産とは知らず、標本2枚分の枝を採集

したのみであった。後日、標本を作成し、文献にも当りテツカエデと同定、同時に神奈川県新記録であることを確認した。

[証拠標本]

厚木市大山唐沢峠(820m),1995.10.9,諏訪哲夫,[ACM-6990]

厚木市大山唐沢峠(820m),1995.10.9,高橋秀男,[KPM-101872]

テツカエデは、清水建美(1989)によれば日本の固有種であり、倉田悟(1968)によると山形・新潟・長野などの山地には珍しくないが、西日本には少なく、宮崎県が南限であるという。近県の植物誌等をしらべてみると、静岡県(天城山・富士山・安部峠)、山梨県(鳳凰山)、埼玉県(三峰山)、群馬県(尾瀬・榛名山・赤城山・迦葉山・谷川

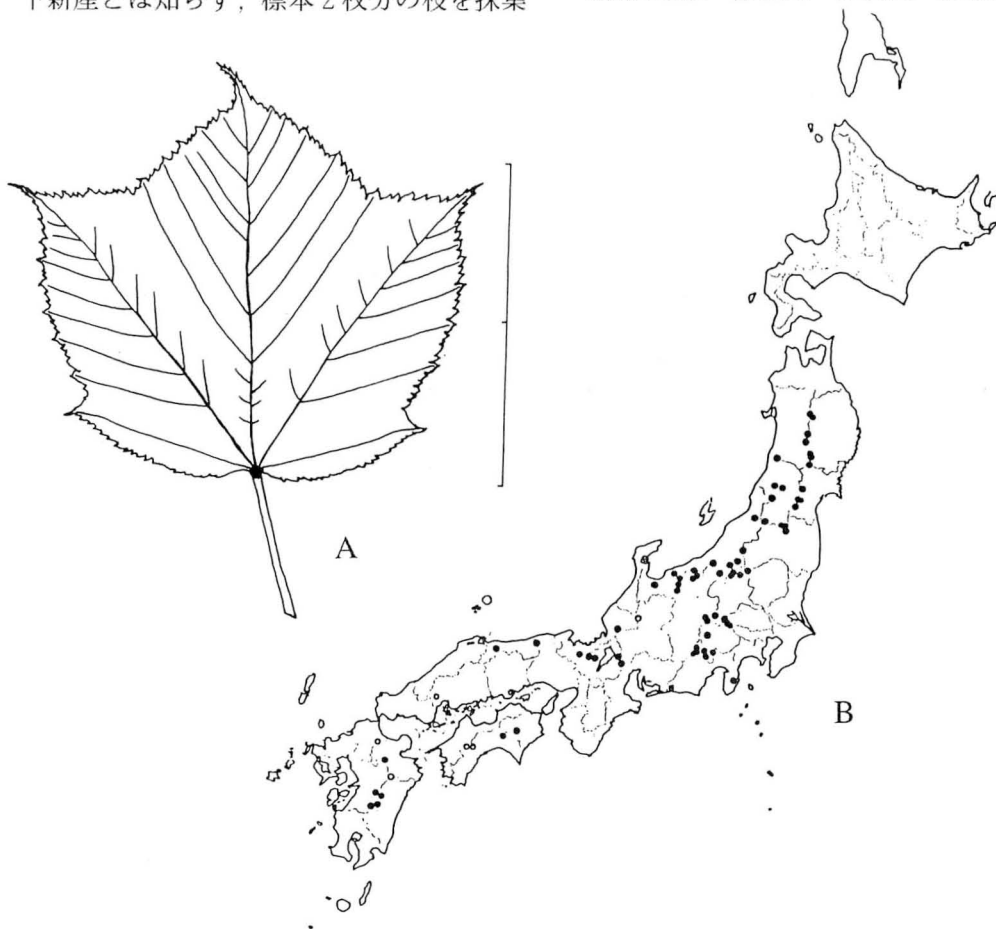


図. テツカエデの葉形と分布図.

A:葉形(スケールは10cm), B:分布図(Ogata 1965による). 神奈川県は空白になっている.

岳)などに記録がある。Ogata(1965)によれば、関東地方の分布の中心は海拔1500-1800m付近だというのが、今回の記録地は海拔820mであり、かなり例外的存在のように思われる。

テツカエデの特徴としては、樹高15-18m、葉は対生し葉身は五角形、長さ6-15cm、幅5-20cm、5浅裂し基部は浅心形~切形、裂片は広三角状で鋭尖頭、重鋭鋸歯縁。脈は掌状脈、表面の細脈は凹入、裏面の脈腋に毛がある。葉柄は2-17cm。5-8月開花、円錐花序に多数の黄花をつけ、垂れ下がる。両性花と雄花を同一花序につけるが、雄花のみの株もある。がく片、花弁とも5個、がく片は長さ1mm、花弁0.5mm。雄ずいは8本。果期は8-10月、分果は斜めに開出し、翅とともに長さ3.5-4cmである。

以上、新記録のテツカエデについて紹介したが、発見したのは1株のみであり、今後、丹沢山塊全体について精査が望まれる。

参考文献

- 植松春雄, 1981. 山梨の植物誌. 595pp. 井上書店. 東京.
- Ogata Ken, 1965. A Dendrological Study on the Japanese ACERACEAE, with Special Reference to Geographical Distribution. pp.31-32,87 演習林報告 No.60, 東京大学農学部付属演習林.
- 奥山春季, 1974. 日本植物ハンドブック. 783pp. 八坂書房. 東京.
- 倉田悟, 1968. 原色日本樹木図鑑Ⅱ. 265pp. 地球社. 東京.
- 北村四郎他, 1971. 原色日本植物図鑑木本編Ⅰ. 453pp. 保育社. 大阪.
- 群馬県植物誌編集委員会, 1968:群馬県植物誌. 356pp. 群馬県高校教育研究会生物部会・群馬県生物教育研究会. 前橋.
- 清水建美, 1989. カエデ科. 日本の野生植物木本Ⅱ. pp.7-18, 平凡社. 東京.
- 杉本順一, 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規出版. 東京.

ヤブマオ属をどう扱うか

城川四郎

ヤブマオ属の特性

1. ヤブマオ類には無性生殖型が多い。

ヤブマオ類には雄花をつけず、雌花だけで種子を作るものが多く、それらは減数分裂、受精が行なわれなくても繁殖力のある種子を作る能力がある。しかし、その無性生殖型の種類も、ときには雄花を咲かせ、生殖能力のある花粉を作ったり、雌花が他の個体の花粉を受けて受精し、雑種をつくることもある。その雑種は無性生殖能力を受け継いで持つために、あたかも独立の種のように繁殖する。

2. ヤブマオ類の植物は変異が激しい。

一般の有性生殖種では、雑種は普通生殖能力がないために、その個体一代で終わる。それに較べ、無性生殖能力を持つヤブマオ類では、ときに有性生殖によって遺伝的変異を蓄積しながら雑種がどんどん繁殖するために、さまざまな変異を持つ植物群が存在する。

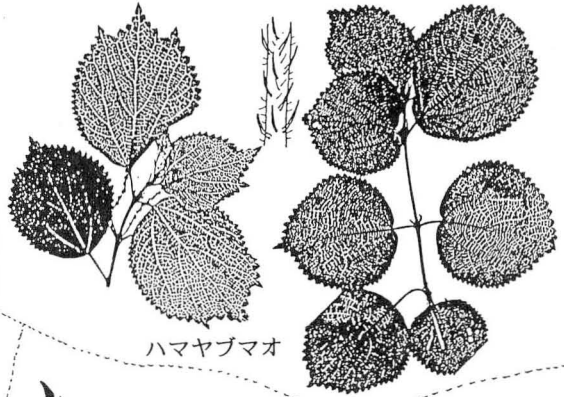
3. ヤブマオ類の種名として最もよく知ら

れているヤブマオとメヤブマオの実体が判然としない。矢原氏はヤブマオが極めて多型的な種であり、ヤブマオとメヤブマオとの境界は不明確で、ヤブマオ自体が種としての実体を持つものかどうか疑問が残ると述べ(1983福岡の植物No8)ながらも、*Boehmeria japonica* ヤブマオの基準標本はメヤブマオに近い型であるから狭義のヤブマオと区別して var. *japonica* トガリバヤブマオの名を与えるとし、ヤブマオ(狭義)には *Boehmeria japonica* var. *longispica* の組み替え名を発表した(1984植研Vol59No5)が、ヤブマオの実体が曖昧であることには変わりはない。

ヤブマオ類の標本採集の注意

1. ヤブマオ類の標本には茎中部の大型葉と花序部分が必要である。ヤブマオ類の葉形は、若い未熟株と成熟株では変化し、茎上(P485に続く)

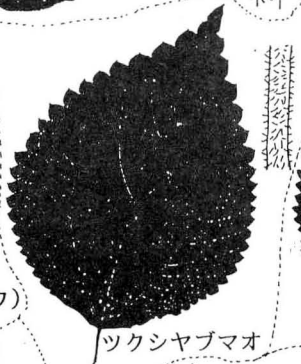
ラセイタソウ



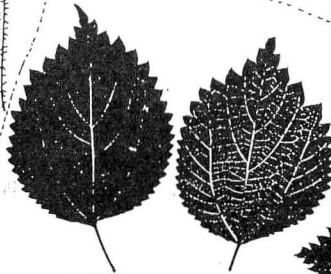
ハマヤブマオ



(ウスバラセイタソウ)



ツクシヤブマオ



ツクシヤブマオ×ヤブマオ?



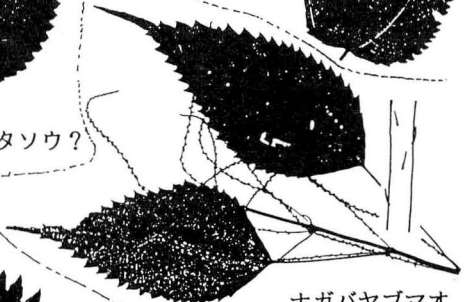
コヤブマオ



ツクシヤブマオ×ラセイタソウ?
トウカイヤブマオ



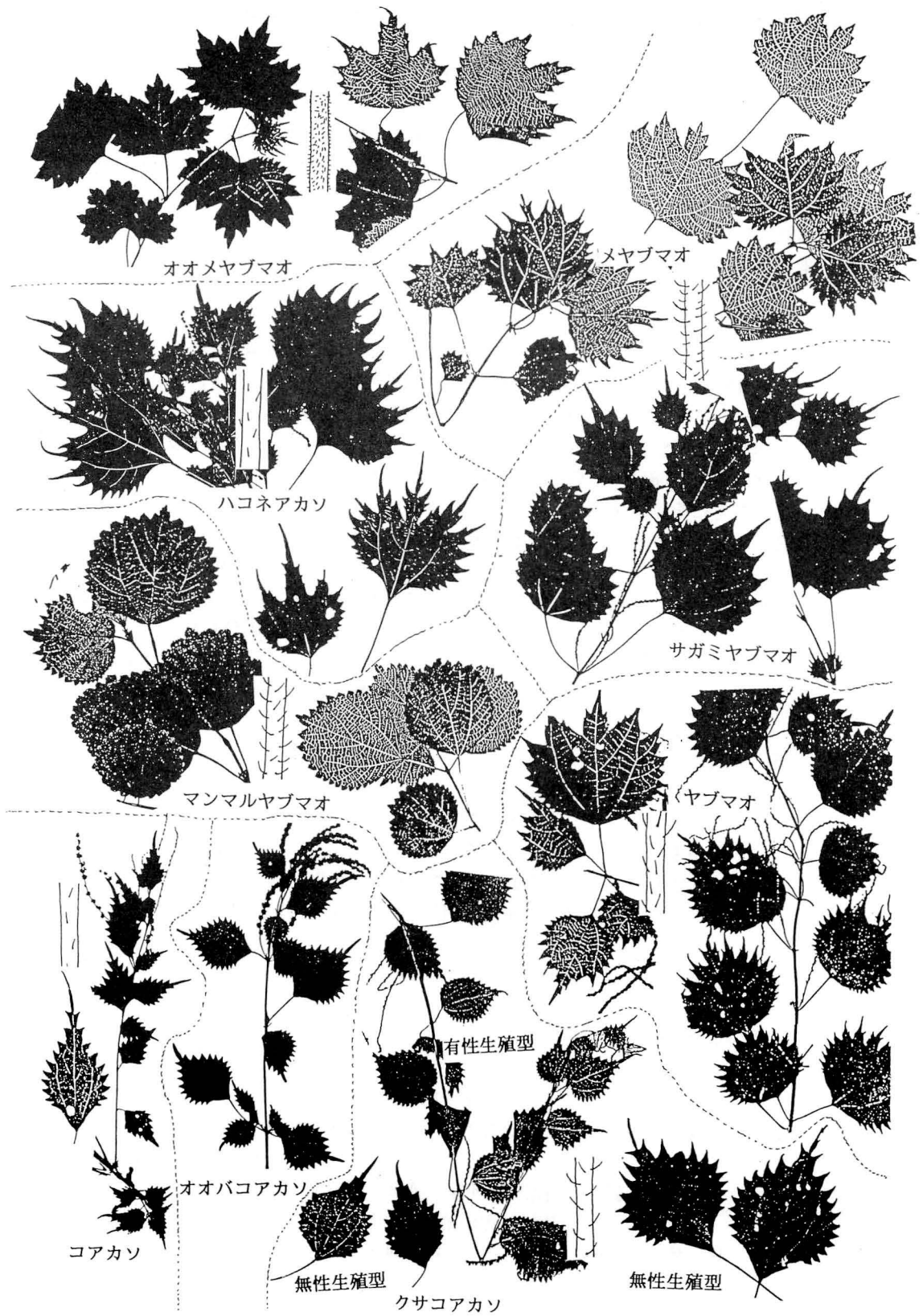
カタバヤブマオ



ナガバヤブマオ



トウゴクヤブマオ



オオメヤブマオ

メヤブマオ

ハコネアカソ

サガミヤブマオ

マンマルヤブマオ

ヤブマオ

有性生殖型

オオバコアカソ

コアカソ

無性生殖型

クサコアカソ

無性生殖型

神奈川県産ヤブマオ属 (*Boehmeria*) 検索表

- A. 葉は互生(カラムシ亜属)。
- B. 葉柄の毛は開出, 茎下部の葉も葉裏は雪白, 葉基部は円形。ナンバンカラムシ *B. nivea*
- B. 葉柄の毛は斜上, 葉基部はくさび形。
- C. 花序付近の葉は裏面に白色綿毛あり, 茎下部の葉の葉裏は淡緑。
クサマオ *B. nivea* subsp. *nipponivea*
- C. 花序付近の葉にも裏面に白色綿毛がない。
アオカラムシ *B. nivea* var. *concolor*
- A. 葉は対生(ヤブマオ亜属)。
- B. 葉質粗剛, 葉の鋸歯は微細, 片側40以上。しばしば2裂葉。有性生殖種。
ラセイタソウ *B. biloba*
- B. 葉の鋸歯は片側40以下。
- C. 葉の鋸歯は片側17以上, 先の方まで粗大化しない。ふつう単鋸歯だけ。
- D. 葉は厚く, 楕円形~広卵形。葉裏主脈に粗毛と細毛がある。ときにラセイタ耳状突起を出す。ラセイタソウを推定祖先種とする雑種起源の倍数体。ハマヤブマオ *B. arenicola*
葉形が楕円状被針形~狭卵形のもの, ウスバラセイタソウ *B. tenuifolia*
- D. 葉は厚く, 卵形。葉裏主脈に方向不定の細毛密生。ツクシヤブマオ *B. kiusiana*
- E. ときに重鋸歯を示す。ツクシヤブマオ×ヤブマオ? ツクシヤブマオ扱い
- E. まれにラセイタ耳状突起がある。ツクシヤブマオ×ラセイタソウ?
トウカイヤブマオ(矢原仮称) *B. sp.*
- D. 葉はやや硬く, 楕円状被針形, 葉裏主脈の毛は疎。花穂軸の毛は密。ときにラセイタ耳状突起がある。ラセイタソウとコアカソの雑種起源の倍数体。
コヤブマオ *B. minor*
- D. 葉は薄く, 線状長楕円形~長楕円形。葉裏主脈に短毛が疎らに伏すか斜上。日本には無性生殖型だけ。
ナガバヤブマオ *B. sieboldiana*
- C. 葉の鋸歯は片側17以下。
- D. 葉の先の方の鋸歯は粗大化。
- E. 葉の鋸歯は欠刻化, 重鋸歯化を示す。
- F. 葉裏主脈に粗毛と細毛がある。ときにラセイタ耳状突起を出す。
- G. 葉は大型扁円形, 基部は切型~浅心形。葉裏主脈の粗毛は開出, 弓曲。ラセイタソウとメヤブマオを推定祖先種とする雑種起源の倍数体。
カタバヤブマオ *B. dura*
- G. 葉は卵円形, 葉裏主脈の粗毛は斜上。ラセイタソウ×ヤブマオの雑種。
トウゴクヤブマオ(矢原仮称) *B. biloba*×*japonica*
- F. 葉裏主脈には同質の毛がある。
- G. 花穂軸の毛は密生, 果実の先端付近の毛はめだって長い。
- H. 葉は明らかに3裂状, 茎上部の若い葉も3裂状。葉裏主脈には方向不定の細毛を密生。アカソとヤブマオを推定祖先種とする雑種起源の倍数体。
オオメヤブマオ *B. maximowiczii*
- H. 葉の3裂状は明瞭~不明瞭。葉裏主脈の毛は開出。アカソとヤブマオを推定祖先種とする雑種起源の倍数体? メヤブマオ *B. platanifolia*
- H. 葉は重鋸歯の少ないものから欠刻状重鋸歯の著しいものまで多形。葉裏主脈は短毛斜上。実体のやや曖昧な, 多くの変異を包含する倍数体。
ヤブマオ *B. japonica*

G. 花穂軸の毛は疎ら，果実の先端付近の毛は目立たない。葉の3裂状が明瞭～不明瞭
無性生殖型。 ハコネアカソ(仮称) *B. sp.*

※日本海側に分布するアカソ *B. sylvestrii* に類似する。箱根に分布。

E. 葉はほとんど重鋸歯化せず，鋸歯はよく伸びて尖る。葉裏主脈の毛は開出。クサコアカソ
とヤブマオを推定祖先種とする雑種起源の倍数体? 分布量が多い。

サガミヤブマオ(仮称) *B. sp.*

D. 葉の鋸歯は先の方まで粗大化せず，重鋸歯化を示す。葉は円形。葉裏主脈の毛は開出。重鋸
歯が目立たず一見ハマヤブマオに似る。分布量は少ない。 マンマルヤブマオ(仮称) *B. sp.*

D. 葉の鋸歯は先の方まで粗大化せず，単鋸歯。花穂軸の毛は疎～やや疎，果実の先端付近の
毛は目立たない。

E. 茎は木質(低木)。葉の片側の鋸歯5～10。葉の基部は鋭いくさび型。花穂軸の毛は伏
す。有性生殖型と無性生殖型(倍数体)がある。有性生殖型は雄花序を出し，正常な花粉
をつくり，葉は小形の傾向がある。無性生殖型はふつう雄花序を出さない。開花期7月
初旬～8月初旬。 無性生殖型。 コアカソ *B. spicata*

有性生殖型。 コバノコアカソ *B. spicata* var. *microphylla*

E. 茎の下部は木質化，冬芽が地上にできる。葉の片側の鋸歯9～12。葉の基部のくさび
型は鋭くない。花穂軸の毛は立つ傾向。雄花序を出さない。コアカソとクサコアカソの
雑種。 オオバコアカソ *B. gracilis* × *spicata*

E. 茎は木質ではない。葉の片側の鋸歯11～16。葉の基部は広くくさび型～円形。花穂
軸の毛は立つ。有性生殖型と無性生殖型(倍数体)がある。無性生殖型もふつう雄花序を
出すが花は成熟しない。花が開くまでどちらの型か外形で識別できないが，有性生殖型
が小型の傾向。開花期7月下旬～8月下旬。 クサコアカソ *B. gracilis*

※1. 検索表中の「ラセイタ耳状突起」とは，ラセイタソウの2裂葉の性質が遺伝され，葉の上部に角状
の突起を生ずるものがあるので，その角を表現するための造語である。

※2. 各種類のシルエット図の傍に，葉裏主脈上に生える毛の状況を，ルーペで見た感じで書き添えて
ある。

※3. コアカソの有性生殖型をコバノコアカソとする説を採った。タイプ標本には花序がないので問題
はあるが，有性生殖型は葉が小さい傾向があることは確かであり，タイプロカリテイの伊豆天城で
有性生殖型の生育を確認できたからである。

部の花序に近い葉と茎中部の大型葉とでも
異なる場合が多い。その葉形，毛の状態，
花序部分が分類群の識別特徴として重要で
ある。茎中部付近の大型葉を欠く標本では
ほとんど種類の識別はできない。

2. ヤブマオ類の標本では葉の鋸歯の状況が
重要であるにもかかわらず鋸歯が折れやす
いので，葉の辺縁の保存に注意が必要であ
る。

ヤブマオ類の見分けどころ

・花序，花，果実について雄花序の有無，
花穂の形状，花穂軸の毛の状況，果実の毛

の状況，雄花の開裂状況，花粉の稔性
・茎について木化の程度，冬芽の位置
・葉について葉質，葉形，欠刻，鋸歯の状
況，葉表や葉裏(特に主脈)の毛の状況
※ 葉裏主脈の毛の状況 ①多細胞の毛根
が隆起，剛毛状(ラセイタソウおよびその雑
種起源種) ②開出毛(メヤブマオ，サガミ
ヤブマオ，マンマルヤブマオ，クサコアカ
ソ?) ③斜上毛(ヤブマオ，コアカソ) ④
上向伏毛(ナガバヤブマオ) ⑤方向不定～
開出細毛密生(オオメヤブマオ，ツクシヤブ
マオ)

■1990神奈川県立博物館研究報告No.19神奈川県産ヤブマオ属の検討の検索表に用いた仮称の変更について

①ミツゲメヤブマオは、矢原氏がオオメヤブマオとメヤブマオは同じものであるとされているので混乱を避けるためオオメヤブマオと判断した分類群にミツゲメヤブマオの仮称を用いた。しかし、オオメヤブマオはメヤブマオと別の分類群として認めるべきだと考えられるのでここではオオメヤブマオ(*B. maximowiczii*)とした。

②ウスゲヤブマオは、ヤブマオの実体が把握できないものの、諸文献によるとヤブマオは茎も葉も多毛であるとしているので、神奈川県産のほとんどのヤブマオが疎毛であることを重視してウスゲヤブマオの仮称を用いた。しかし、ヤブマオ自体きわめて多形とされているので、あえて仮称を用いずヤブマオ(*B. japonica*)とした。

③ヒラキゲメヤブマオは、メヤブマオの実体が把握できないのでオオメヤブマオとは別のメヤブマオの分類群として、葉裏主脈の開出毛に着目して仮称したが、このグループこそもっとも典型的なメヤブマオと判断されるのでメヤブマオ(*B. platanifolia*)とした。

■シマナガバヤブマオ(*B. egregia*)等、神奈川県内に分布の可能性があっても、特徴の把握できる標本のまとまっていないものは取り上げなかった。

丹沢産シロテンマ

(一名ヒメテンマ)覚え書き

秋山 守

1995年8月5日、丹沢・大山自然総合調査のため西丹沢畦ヶ丸方面へ勝山、高橋、城川、長谷川、増子、田中の先生方と出かけた折、ブナ林下でシロテンマ1本、アオテンマ2本を発見した。シロテンマは大変珍しい腐生ランで、日本では群馬、栃木、茨城、千葉、富山、滋賀県からの報告を見るにす

ぎない(国外では中国北東部に分布する)。

本種は北川政夫先生が満州植物誌考(1939)に「オニノヤガラ *Gastrodia elata* より丈低く細長にして茎は青灰色を帯び花は少数、花冠は白色にして長さ10mm」と形態的知見から満州国安東省鳳凰山(現在の中国遼寧省)を基準産地としてオニノヤガラの新変種 *G. elata* var. *pallens* Kitag. として発表されたが、津山(1956)は全体が貧弱で花数も少ないが基本的にはオニノヤガラと識別点がないことからオニノヤガラの一型と考え品種に格下げされ、*G. elata* forma *pallens* (Kitag.)Tuyama とされ、現在はこの学名が用いられている。しかし、当日採集したオニノヤガラの近似種アオテンマ *G. elata* forma *viridis* の小嚙体を生品で比較観察したところ、シロテンマの小嚙体は円状突起をし、アオテンマは尖状突起をした傾向がみられた。シロテンマとアオテンマの小嚙体を比べてみて、やはり変種あつかいがよいと思われる。

当日採集した両種の外見

シロテンマ

塊茎は紡錘形で斜上し長さ5.9cm、径6mm(太さ2.2cm)、花茎は円柱状で直立し、高さ22.3cm、茎の上部1.8cm間に6花をつけていた。花は黄白色、葯帽は淡白色、唇弁は白色、先端部に橙色をした斑紋が2個あり、縁は腺毛状に細裂している。

アオテンマ

塊茎は楕円形で、長さ11cm、径3cm(太さ9.4cm)、花茎は円柱状で直立し、高さ107.5cm、茎の上部44.5cm間に51花を総状花序につけてた立派な個体でした。花は淡黄緑色、葯帽は淡白色、唇弁は先端が黄色で他は白色、縁は房状に細裂する。

終わりに文献をご提示いただいた勝山、高橋両先生、また、当日お世話になった先生方に厚くお礼申し上げる。

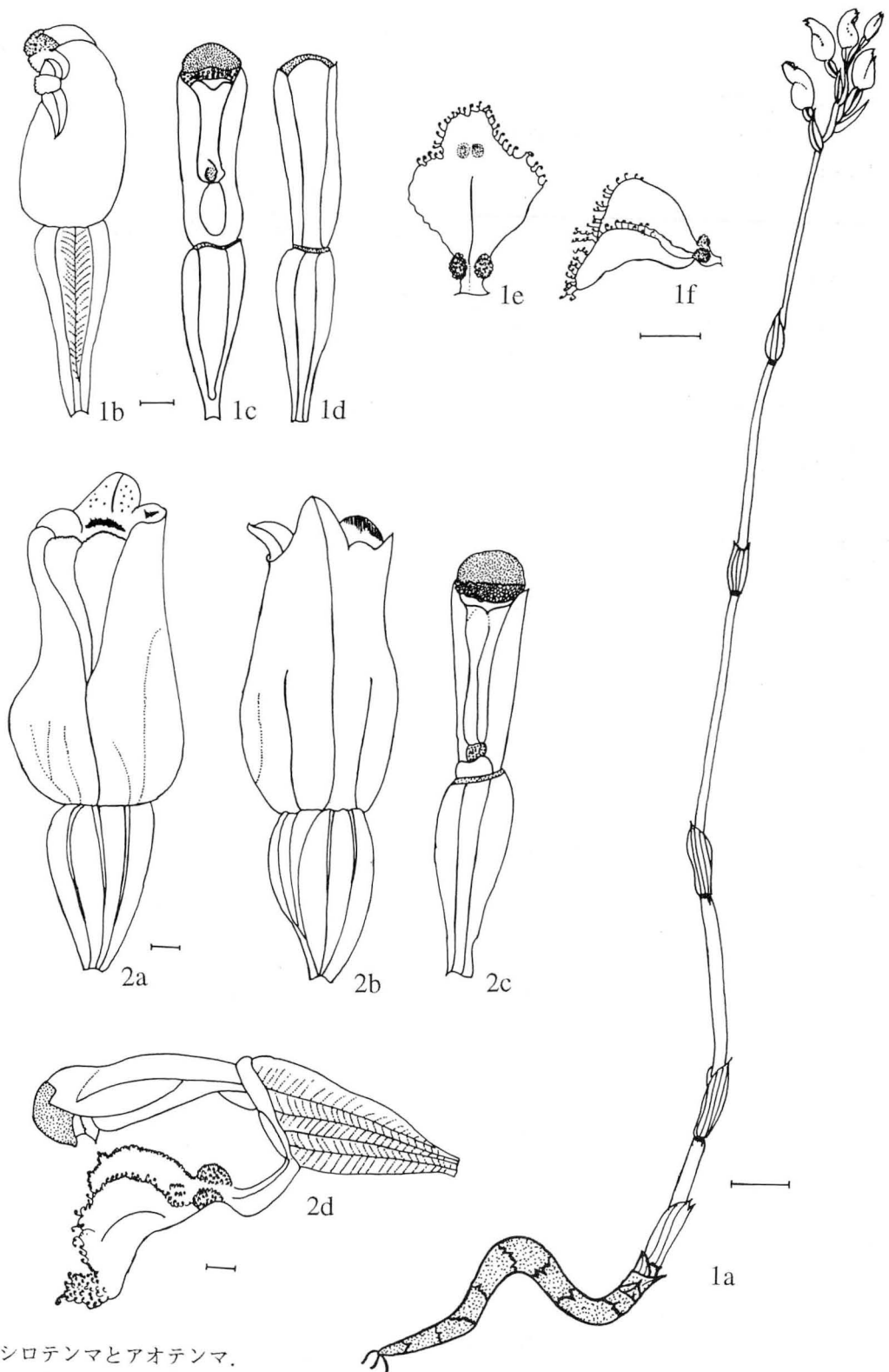


図. シロテンマとアオテンマ.

1. シロテンマ (a: 全形, b: 花の側面, c: 薬柱の腹側, d: 同背側, e: 唇弁の上面, f: 同側面), 2. アオテンマ (a: 花の腹面, b: 同背面, c: 薬柱の腹側, d: 薬柱と唇弁の側面). スケールは, 1aは1cm, それ以外は1mm.

文 献

- Kitagawa, M., 1939. Lineamenta Florae Manchuricae, 477 pp.
津山 尚, 1956. 日本産オニノヤガラ属雑記(2). 植物研究雑誌, 31: 77-83.

明治時代の

神奈川県産植物標本について 諏訪哲夫

今般, 厚木市教育委員会は寄贈・寄託維管束植物目録(1)を発行したが, この中に県立厚木高等学校植物コレクション目録がある。このコレクションは, 1995年(平成7年)1月, 県立厚木高校の生物準備室で発見されたもので, 厚木市教育委員会が借用, 整理に当り翌1996年, 同委員会へ寄託收藏された。

県立厚木高校の前身は, 1902年(明治35年)創立の旧制厚木中学校だが, 同校第二代博物科教諭の石田光治郎(後に鈴木姓)が中心になって, 明治から大正へかけての標本収集に当たったと考えられる。石田光治郎は霊岳大山(1917)を編集し, 付録の大山植物総目録に維管束植物817種類を記録している。

神奈川県植物目録1933は, 神奈川県最古の植物目録とされるが, これは松野重太郎を中心とした神奈川県博物調査会(1912年発足)の労作である。この目録で石田は, 鈴木光治郎の名で調査会の一員になっている。

さて, 厚木市教育委員会に寄託された標本は, 1890年(明治23)から1951年(昭和26)に至る1435点であるが, このうち下記のものには神奈川県植物目録1933の証拠標本である可能性が高いので紹介したい。

- 1 サトメシダ *Athyrium deltoideofrons*(オシダ科)
芦の湯(箱根町)1912.7 松野重太郎[ACM-31318], 神奈川県レッドデータ生物調査報告書1995(以下「県R」と略記): 減少種

- 2 ホウビシダ *Asplenium unilaterale*
(チャセンシダ科)

逗子(逗子市)1914.7.10 松野重太郎[ACM-31323], 県R: 減少種

- 3 シバナ *Triglochin martimum* (シバナ科)
平沼(横浜市平沼)1912.11.3 松野重太郎

[ACM-30019,30020], 県R: 絶滅種

- 4 マルバオモダカ *Caldasia parnassifolia*
(オモダカ科)

都筑郡都岡村白根大池(横浜市都岡)1906.10.7 中山每吉[ACM-30123], 県R: 消息不明種

- 5 ヒメコウホネ *Nuphar subintegerrimum*
(スイレン科)

高座郡海老名村(海老名市)1906.7.10 中山每吉[ACM-30178], 県R: 絶滅危惧種

標本ラベルにはコウホネとあり, 神奈川県植物目録1933でもコウホネとしているが, 1996年筆者は現存の海老名市産を調査, 県立生命の星・地球博物館標本とも照合して中山標本をヒメコウホネと同定した(FLORA KANAGAWA No.43)。

- 6 ヒツジグサ *Nymphaea tetragona*(スイレン科)

高座郡渋谷村福田の池(大和市)1906.10.6 中山每吉[ACM-30177], 県R: 絶滅種

- 7 ムカゴソウ *Herminium lanceum* var. *longicirure*
(ラン科)

中津村八菅山(愛川町八菅山)1912.8 茅誠司[ACM-31068], 県R: 絶滅危惧種

- 8 ダイサギソウ *Habenaria miersiana*(ラン科)

煤ヶ谷(清川村煤ヶ谷)1912.5. 石田光治郎[ACM-31073], 県R: 絶滅種

- 9 カリガネソウ *Caryopteris divaricata*
(クマツヅラ科)

逗子(逗子市)1914.7.10 松野重太郎[ACM-30022], 県R: 絶滅危惧種

- 10 ミズネコノオ *Dysophylla varticillata*
(シソ科)

戸塚(横浜市戸塚区)1914.10 松野重太郎[ACM-30023], 県R: 絶滅危惧種

- 11 アズマギク *Erigeron thunbergii*(キク科)

足柄上郡山田村(大井町山田)1912.(推定)
渡辺理平[ACM-30203], 県R: 絶滅危惧種

以上は、貴重種について拾ったものであるが、神奈川県植物目録1933にある厚木、大山、箱根などに対応すると考えられる標本は、他にいくつもある。

なお、ジョウロウスゲ *Carex capricornis* (カヤツリグサ科) 高座郡海老名村(海老名市) 1907.6.16 中山毎吉 [ACM-30138] は、今までの県下の文献に全く記載がないが、今後はレッドデータブックに絶滅種として記録されるべき種と考えられる。

寄贈・寄託維管束植物目録(1)は、厚木市教育研究所、武井尚、諏訪哲夫各コレクションを含み、主な研究機関へ寄贈されるが、有料販売もされるので希望者は、厚木市教育委員会文化財保護係 TEL0462-23-9558 へ問合せられたい。

参考文献

- 厚木市教育委員会, 1996. 厚木の植物1996/植物に魅せられた人たち. 48pp. 厚木市教育委員会.
- 厚木市教育委員会, 1997. 収蔵資料目録2-寄贈・寄託維管束植物目録(1). 215pp. 厚木市教育委員会.
- 石田光治郎, 1917. 大山植物総目録, 霊岳大山. 付録1-25. 自刊.
- 神奈川県レッドデータ生物調査団, 1995. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書, 神奈川県立博物館調査研究報告(自然科学) No.7, 257pp. 県立生命の星・地球博物館.
- 諏訪哲夫, 1996a. よみがえる100年前の植物標本. 郷土資料展示室だより, 25: 2-3. 厚木市教育委員会.
- 諏訪哲夫, 1996b. 神奈川県のスイレン科コウホネ属のこと. FLORA KANAGAWA, 43: 470-471. 神奈川県植物誌調査会.
- 松野重太郎, 1933. 神奈川県植物目録. 111pp. 神奈川県博物調査会.

神奈川県新産と思われる

シダおよびその他

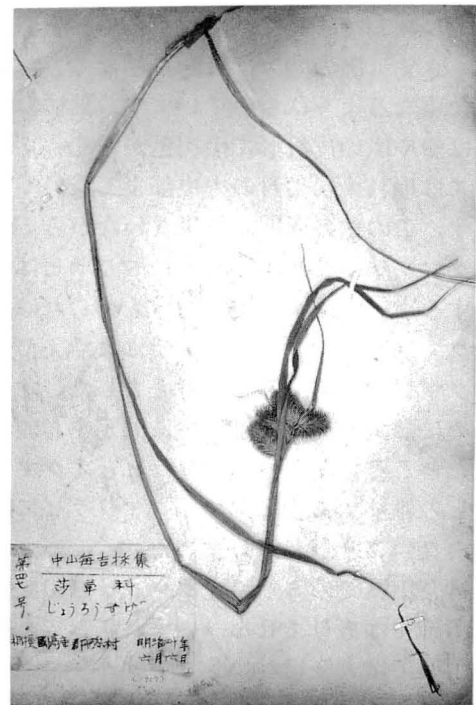
田中一雄

1996年は「神奈川県植物誌1988」のときに歩いた小田原市と南足柄市の箱根東麓を約10年ぶりに一年間で50回ほど歩きました。もちろん、まだ担当のエリアの50パーセントにも達してはいないのですが、前回とは違う眼で見ている気がします。この観察をとおして初めて見つかり、神奈川県では極めて珍しいと思われるシダが数種発見できましたので、報告いたします。

シマシロヤマシダ

6月17日、小田原市水之尾でこのシダを見たときは、普通のシロヤマシダだと思いましたが、10月に再訪したときに変だと気がつき、岩槻邦男教授に同定していただいて確定しました。

根茎は長く這い、葉は全長1mを超える大型のシダで、シロヤマシダよりの葉が柔ら



ジョウロウスゲの標本

かく緑色が濃く、ソーラスは線状でソーセージ状に盛り上がり、葉脈に接するほど裂片の中央に寄るのが特徴です。標本にするとやや黒っぽくなります。

名前のおり南国のシダで、現在のところ北限は岐阜県で、伊豆半島にもまだ記録がありませんし、もちろん神奈川県では新産だと思えます。発見時、葉の枚数は17～18枚でした。12月中旬に冬には葉がどうなるか見に行ったところ、大きい葉はすでに倒れ、灌木の陰になった小さい葉は弱ってはいるものの、まだ緑を保っていました。シロヤマシダよりも枯れるのが早く、キヨタキシダとほぼ同じようです。

ミヤマオクマワラビ

11月18日、南足柄市荻野の柄沢水系にある東に面したスギ林の斜面で2株発見しました。最初に見たときの印象は、葉身の細いフジクマワラビだと思いました。フジオシダに比べて端正な姿と、やや黄緑色が強い感じでした。2株から3枚ずつ採取した標本を、帰宅後、詳しく検してみますと、葉身は幅が狭くて細長く、羽片も細く、小羽片は小さく、脈の凹みはほとんどなく、たがいに重なるように着いています。葉柄の鱗片はやや広い皮針形で黒褐色が濃く、ソーラスは崩れずに葉身の中央部まで着いています。この株の周囲には少ないながらミヤマクマワラビが見られる(オクマワラビは多産することなどから考えますと、これはフジクマワラビやフジオシダではなくミヤマオクマワラビであろうと考えました。念のために静岡の志村義雄先生に同定をお願いしたところ、ミヤマクマワラビとオクマワラビの雑種であるミヤマオクマワラビに間違いないことがわかりました。

神奈川県でのミヤマオクマワラビの記録は明確ではありません。いずれにしても神奈川県では大変珍しいシダです。

フナコシイノデ

12月19日、南足柄市三竹の仲沢川水系を

観察したときのことで。15時30分頃、スギとヒノキの混植林の北向きの斜面で、イノデやアイアスカイノデの群落の間に、葉面の艶の鈍いなんとなく変わったイノデを一株見つけました。ソーラスを見ると12月なのに飛散していないので雑種らしいことはわかりましたが、今までに見たことがないシダなので名前がわかりませんでした。

帰宅後、葉を詳しく検したところフナコシイノデらしいと思えたので、さっそく標本を作り志村義雄先生に送って同定をしていただきましたところ、イノデとサカゲイノデの雑種のフナコシイノデとのことでした。

通常イノデとサカゲイノデの雑種はフナコシイノデ、イノデとツヤナシイノデの雑種はツヤナシフナコシイノデと呼ばれています。神奈川県での記録は、1961年に飯田和氏が湯河原町で発見されたのが唯一の記録のようです。35年ぶりに出現した大変珍しいシダなのでご報告いたします。

丹沢での希少なランの記録

平田寛重

少し前のことですが、下記の2種のランを見ましたので報告します。

ユウシュンラン

1989年5月7日、清川村札掛一の沢考証林内の山道沿いの林床に白い小さな花が咲いていました。さっそく写真を撮り、現像したフィルムを見てみると、どうもユウシュンランのように思えました。神奈川県植物誌1988では、愛川と清川-3で記録されていますが、数少ない種類でした。清川-3の記録が同じ考証林であるかどうかについては不明です(事務局注 物見峠でした)。また、FLORA KANAGAWA No. 41では、箱根の記録が紹介されています。

サカネラン



ユウシュラン

1989年5月14日、清川村堂平下部の植林(海拔1100m付近)の林床に3本のサカネランが咲いていました。時期のせいかもしれませんが、その後、その場所では観察していません。神奈川県植物誌1988では、秦野-1, 2で記録されているだけで、それ以外はFLORA KANAGAWA No. 41で高橋秀男先生が報告されています。しかし、清川-1の記録としては初めてと思われます。

三浦半島で発見されたカゲロウラン

星 寛治

はじめに

カゲロウランは常緑広葉樹林内に生える常緑の地生ランで、台湾、屋久島、宮崎県(寺崎, 1978)、高知県(西, 1978)、伊豆大島(正宗, 1987)からの報告がある。1994年11月に三浦半島でカゲロウランを見つけ、その後、継続して観察し、1996年9月には花も見ることができたので報告する。神奈川県新産。

発見の経緯

17年前にコ克蘭を見るために三浦半島

の山中に入ってから、同地域では18種類のラン科植物の自生を確認している。1994年11月に長年継続して観察しているナギランの近くでシュスランに似たラン科植物を見つけた。数年前から同じ地域で観察しているシュスランとは形状が異なるので調べてみたところ、カゲロウランと考えるようになった。しかし、花をみていないので決め手がなかった。

同年12月には最初の発見地点(A地点)から約500m離れたB地点で、ナギランを相当数株発見した。ナギランを観察していてカゲロウランを見つけたので、ここでもカゲロウランが見出せるのではないかと探してみたところ、カゲロウランと思われるものが約20株ほど見つかった。確認のために2株採集して、そのうちさく果のついたものを県立博物館に提出した。このときにはやはりシュスランではないかとの回答をいただいた。しかし、第一印象以来の疑問が晴れないので開花を待つこととした。

翌年、1996年9月11日に現地で開花を見ることができ、写真に撮影し、博物館に送ったところカゲロウランであることを確認していただいた。

自生地の状況

自生地の環境はサクラ、クリ、コナラなどの落葉広葉樹が大きく育ち、その間にマ



カゲロウラン

テバシイ、ヒサカキ、アオキ、ヤツデ、カクレミノなどの常緑広葉樹が混じった林である。樹木にはアケビ、フユツタなどがからみつき、ササがところどころに繁茂している。下草はジャノヒゲ、ヤブラン、キチジョウソウが多く、ミヤマウズラ、コ克蘭、エビネ、ギンラン、キンラン、ササバギンラン、ナギランなどのラン科植物も散見される。林床には木洩れ日が差し、樹林内としては比較的明るい感じのするところである。南西に面した緩い傾斜のところ、斜面の頂部や底部にはなく、斜面の中部に集中して見られる。地表はやや隠れる程度に落ち葉が堆積している。

生態の観察

1996年の観察記録を以下に記す。

6月16日 昨年からの葉がついた状態の株が見られる。

7月13日 新葉が伸びはじめている。旧葉はすこし傾いて根元がぐらつく。

8月7日 新葉の間から花茎が伸びている。根元はしっかりとる。

9月11日 大部分の株に花茎が立ち、蕾がふくらんでいる。そのうちの1株に1花が開いている。

9月18日 どの株も花茎を伸ばし蕾をつけているが、開花しているものはない。

10月16日 B地点では花は終わった様子で、花茎の萎えた株もある。花茎の残っているものは子房が膨らんでいる。

11月7日 淡紅色のさく果が3~7個ついている。A地点の1株に1花が開いている。これはB地点のものから約2ヶ月遅れて開花した。

カゲロウランは横にはった茎の節々から1本の太めの根が出て、腐葉の下の地面に達して植物体を支えている。そのために新葉が伸びてくると、その重さできわめて不安定で、少しの衝撃でもぐらついてしまう。大部分の株がササや灌木の株元、落ち枝のわきなどに見られるのは、それによ

って生えているためかもしれない。

新葉の芽は必ず旧葉のすぐ下の節から出て成長を続け、それにつれて茎は傾いてゆき、ついには地面に着くようになる。新葉部分は、茎に対して直角状に上に向かって伸びて新しい茎を形成する。この時期に株が不安定になるが、やがて新葉群の中心から花茎が伸びて、それに蕾がつく頃には安定してくる。これと引き換えるように旧葉は枯れ落ち、痕跡となって横走する茎に残る。痕跡よりも下部の節からは新しい根ができていっそうしっかりと固定される。この作用は数年繰り返されるらしく、大きな株の横走する茎には2~3個認められた。

幾度となく現地に入って、株を確認しているが、株の存在を確認しようとすると、しばらく時間がかかる。しかもその株から目を離すと、もうそれを見失ってしまう。このように捕えにくいことからカゲロウランの名がつけられたのではないかと、勝手に解釈している。

発見のきっかけがナギランであったこと、A、B両地点ともにナギランが存在することから、カゲロウランの発生にはナギランの存在が関係しているような気がする。

おわりに

以上の記録は偶然発見したカゲロウランの大略を報告するもので、はなはだ不完全ではあるが、今後も引き続き観察を実行したいと考えている。なお、これらは県立博物館の勝山輝男氏のご指導によるもので、ここに厚く御礼を申し上げたい。

文 献

寺崎 孜, 1978. ヤクシマアカシユスランとカゲロウラン四国に産す. 高知県の植物(1):79-83.

西 紘平, 1978. 宮崎県日向市でカゲロウランを採集. 植物採集ニュース(96):12.

正宗巖敬, 1987. 日本の自生蘭 写真と図 IV. 自費出版.

1997年度 総会報告

(事務局)

去る4月19日、県立生命の星・地球博物館で、1997年度の総会が開かれました。1996年度の事業報告と決算報告がなされ、1997年度の運営体制と事業計画、予算が審議され可決されました。続いて、9つの調査ブロックの活動報告と今年度の計画の発表がなされ、さいごに、城川四郎代表による「ヤブマオ属をどう扱うか」という題の講演がありました。

●1996年度 事業報告

1996年4月1日 フロラカナガワ42号発行

1996年4月21日 1996年度総会

(平塚市博物館)

1996年10月25日 フロラカナガワ43号発行

その他

『朮山泰一先生卒寿記念論文集』の販売

(継続)

丹沢大山自然環境調査(植物相)への協力

(継続)

神奈川県立生命の星・地球博物館の

情報システムへの協力(継続)

長野県植物誌への協力

※各調査ブロックの活動は割愛しました。

●1997年度 運営態勢

顧問 朮山泰一

代表 城川四郎

運営委員 秋山 守・大場達之・大森雄治・
小崎昭則・小原 敬・笠原基知治・北川淑子・
小林純子・鈴木一喜・諏訪哲夫・高橋秀男・
西山清治・根本 平・長谷川義人・浜口哲一・
守矢淳一・村上司郎・山本 明・勝山輝男・
木場英久・田中徳久

作業委員 ブロック事務局+執筆予定者
ブロック事務局

横 浜：高橋秀男・堀川美哉・武智憲治

川 崎：吉田多美枝・科野由紀

三 浦：山田友久・青木清勝・大森雄治

湘 南：守矢淳一・浜口哲一
厚 木：諏訪哲夫・佐藤恭子・槐 真史
相模原：山口一郎
津久井：小崎昭則
箱 根：井上香世子・古川公貴
その他：城川四郎・勝山輝男・木場英久・
田中徳久

事務局 勝山輝男・木場英久・田中徳久
※運営委員は、予算・決算と事業計画、会
の運営を審議する。

※作業委員は、植物誌の改訂の作業を行
い、各ブロックの事務局と執筆予定者で構
成される。

●1997年度 事業計画

フロラカナガワの発行(年3回を予定)
『神奈川県植物誌1988』改訂のための検討・調査
野外研究会・標本同定会(基本的に各ブロッ
クが主催し、事務局は連絡を受け持つ)
『初山泰一先生卒寿記念論文集』の販売(継続)
神奈川県立生命の星・地球博物館の
情報システムへの協力(継続)

編集後記

●次の総会は、1998年2月28日(土)横浜市こ
ども植物園でおこなわれます。日程が変更
になりましたので、ご注意ください。

●FLORA KANAGAWA No.42でお願いして
から、フロッピーで投稿してくださる方が
増えたので、たいへん手間が省けて助かっ
ております。

今後とも、パソコンやワープロで原稿を
書かれる方は、ファイルをMS-DOSのテキス
ト形式で保存して、印刷された原稿とともに
フロッピーも送ってくださるようお願いし
ます。テキストファイルにできない場合で
も、ふつうにファイルを保存したフロッピー
を原稿と一緒に送っていただければ、ほとん
どの場合、事務局でテキストファイルに変換
することができます。

また、この4月より事務局の電子メールのア
ドレスが下記のとおり変更になりました。

勝山輝男katsu@pat-net.or.jp

木場英久hkoba@pat-net.or.jp

田中徳久tanaka@pat-net.or.jp

電子メールによる投稿もお待ちしておりま
す。その他の連絡にも御利用ください。

●その他ブロックでは、標本整理の会を毎
月第2水曜日に県立博物館の標本製作室で
行っています。他ブロックの方もふるって
ご参加ください。